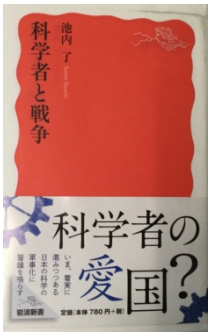
科学者と戦争



参院選後の安倍再改造内閣の顔ぶれを見ると、改憲と軍事化という「二つの顔」が浮かび上がる。そんな折、表題の池内了先生の岩波新書新刊を手にした。表紙カバー裏から―軍事研究との訣別を誓ったはずの日本で、軍学共同が急速に進んでいる。悲惨な結果をもたらした歴史への反省を忘れ、科学者はいったい何を考えているのか。「科学は両義的」「戦争は発明の母」「国への協力は世界標準」などの「論理」を批判。科学者は戦争への応用に毅然として反対し、真の社会的責任を果たすべきである。

本書は、はじめに―軍学共同が急進展する日本、第 1 章 科学者はなぜ軍事研究に従うのか、第 2 章 科学者の戦争放棄のその後、第 3 章 デュアルユース問題を考える、第 4 章 軍事化した科学の末路、おわりに―「人格なき科学」に陥らないために、から構成されている。内容豊富であり、多くの付せんをつけ読んだ。「あとがき」の一部だけでも紹介する。

本書は、いま日本において急進展しつつある軍(防衛省・自衛隊)と学(大学・研究機関)との間の共同研究(=軍学共同)の実態を描き、今後予想される展開に対して警告を発するために書いたものである。軍学共同と表現すれば、あたかも軍と学が対等な関係のように見えるが、現実に進行しているのは大学等学術機関にある研究者が、軍から支給される研究費欲しさのため軍事研究に手を染めていこうとするものであり、結局のところ学が軍に従属し戦争のための研究に堕していくことは明らかである。

それは当然のことで、軍とは自衛であろうとなかろうと戦争することを前提として作られた組織であり、軍が予算を措置するという研究は戦争を有利にするための軍事開発なのだから、軍学共同によって得られた知識は軍が占有するのが当たり前で、学はそれを黙って提供するに過ぎない存在となるのは自明のことなのだ。

「防衛のための軍事研究は許される」という意見も割合多いのだが、防衛は攻撃とセットであることを忘れている。防衛力の強化は攻撃力の強化につながり、それは際限もなく繰り返され、そのような軍拡はどんどんエスカレートするのが軍事開発なのである。

「防衛のための軍事研究は許される」という意見に関して気になることがある。本書でも紹介されているが、日本学術会議会長の大西隆・豊橋技術科学大学長のスタンスだ。毎日新聞 7 月 27 日朝刊「オピニオン」でも、「国の安全に科学者も貢献」といった考えを述べている。「科学者の愛国?」の行方に注目していきたい。

(2016 年 8 月 12 日)